

第2回多摩川流域歴史セミナー

平成27年1月18日（日）13時～

府中市郷土の森博物館

主催 多摩川流域懇談会

協力 府中市郷土の森博物館

講演

『武蔵国府の成立と多摩川中流域の古代集落』

江口 桂 氏



『多摩川50景』大栗川合流点付近
(昭和59年撮影)

【本日のプログラム】 ※時間は予定です。

1. 開会挨拶 13:00～

〔多摩川流域懇談会会長 宮林茂幸氏〕

2. 館内紹介他 13:05～

〔府中市郷土の森博物館館長 小野一之氏〕

3. 講演 13:20～

『武蔵国府の成立と多摩川中流域の古代集落』
〔江口桂氏〕

（休憩） 14:40～14:55

※ご意見ご質問カードのご記入をお願いします

4. 質疑応答・意見交換 14:55～

5. 閉会挨拶 15:25～

〔京浜河川事務所長 船橋昇治氏〕

終了後、館内スタッフによる常設展の展示解説を行います。
（15:40～16:20の約40分） 館内の自由見学も可能です。

【江口桂氏プロフィール】

1966年 愛知県に生まれる

1988年 中央大学文学部史学科国史学専攻卒業

1990年 国学院大学大学院文学研究科博士課程前期修了

同年 府中市教育委員会に勤務

現在、府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課長

著書に『古代武蔵国府の成立と展開』（同成社古代史選書）がある



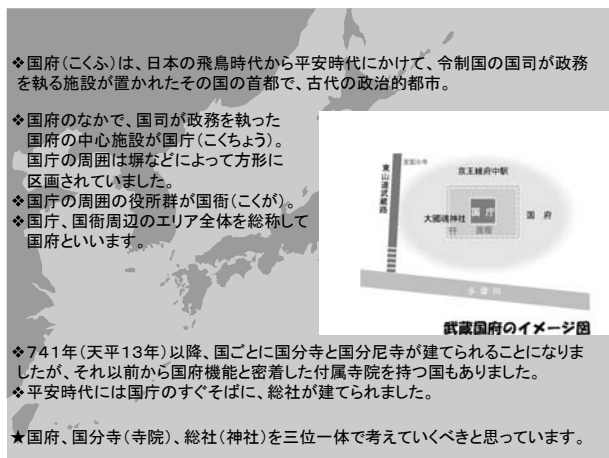
10



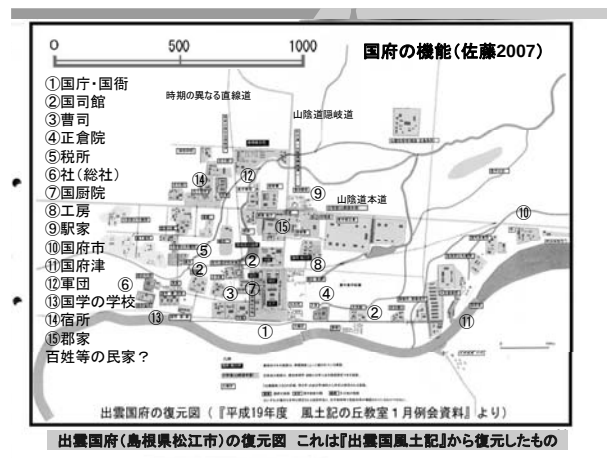
11



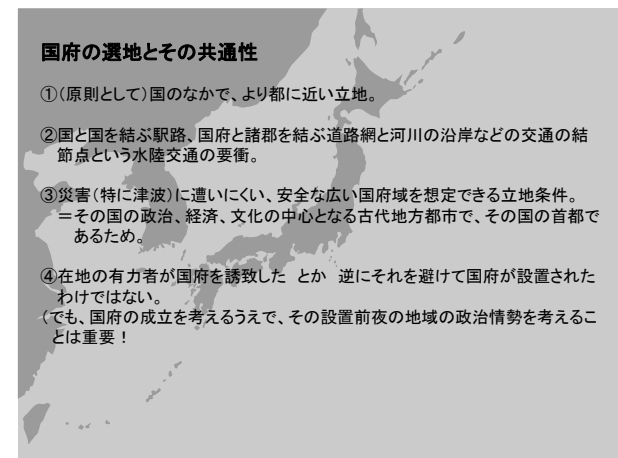
12



13



14



15



16



17



18



国特別史跡 多賀城跡と東日本大震災被害状況 (提供=多賀城市)

19

古代の災害と復興

貞観大地震 東日本大震災は、平安時代前期の貞観地震による大津波の再来といわれています。
貞観11年(869)5月26日(今の暦では7月9日)マグニチュード8.3以上。

■貞観三陸地震『日本三代實録』巻十六より

(貞観十一年五月)廿六日癸未。陸奥國地震動。流光如晝。映。頃之。人民呼。伏不能起。或屋仆壓死。或地裂埋。馬牛駭奔。或相昇踏。城郭倉庫。門櫓墻壁。頽落顛覆。不知其數。海口呻吟。聲似雷霆。驚濤涌潮。浜側漲長。忽至城下。去海數十百里。浩々不弁其涯。原野道路。忽為滄溟。乘船不達。登山難及。溺死者千計。資産苗稼。殆無遺焉。

20

元慶の大地震と武蔵国分二寺の整備

坂井孝一2012「元慶二年の地震と武蔵国分寺」『武蔵野』87-1
①関東における9世紀の大地震
平安時代前期の日本列島は、大地震と火山噴火が相次いだ災害の世紀(年表)
弘仁九(818)年七月の関東諸國大地震
相模、武蔵、下総、常陸、上野、下野等の内陸地震(特に北関東)
マグニチュード7.5と推定
元慶二(878)年十一月の関東南部大地震
相模、武蔵特に被害甚大。伊勢原断層が震源地とされる
マグニチュード7.4と推定
②武蔵国分寺の整備
堂塔の消長 創建期(8世紀中頃)
=塔1、金堂・講堂・中門・南門・鐘樓ほかが建立
再建期(通説『続日本後紀』承和12(845)年条との関係で9世紀中頃)
=塔1、金堂・鐘樓は修繕。講堂・中門は再建。塔2は下部構造のみ完成
●創建と再建期の堂塔存続時期は、瓦の年代観による
●塔再建の瓦葺は、新久・八坂前を中核とする東金子窯群
⇒再検討
金子窯群出土瓦に10郡の郡名瓦があること⇒再建時も武蔵10郡の参画協力があった
=塔再建を願った壬生吉志福正(前男金大領)の「造彼塔」とは、次元を興にする武蔵國を奉
けての工事
壬生吉志福正の「造彼塔」は、塔2。創建期の再被災の修復ではなく、新たな「造塔」であった。
未完成。
●9世紀の武蔵国分二寺の伽藍工事は、創建期に匹敵する大工事
⇒元慶二(878)年の大地震(結論)

21

④在地の有力者が国府を誘致したとか 逆にそれを避けて国府が設置されたわけではない。



坂東の飛鳥時代の古墳と駅路・国府(江口2014より)

地元重視

強い

上野

下野

武蔵

常陸

下総

上総

相模

弱い

22

② なぜ武蔵国の国府が、府中市に置かれたのか？

ア 武蔵国府設置前夜

古墳・集落・生産基盤から

(a)群集墳と首長墓の分布

7世紀中葉に大きな画期

(b)継続的な集落形成の条件

その基盤となる土地と生産

手段の選択が重要

(c)集落の分布と変遷

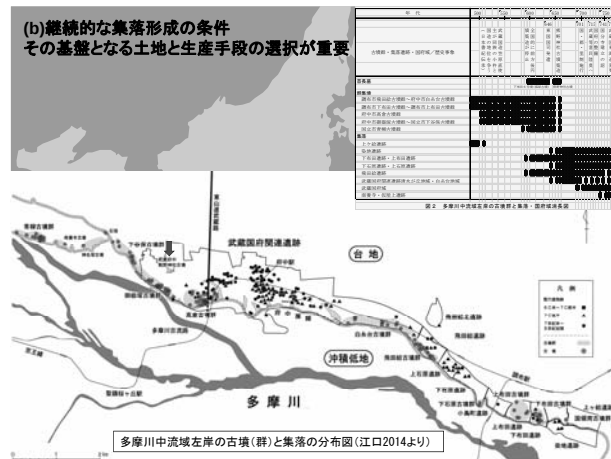
7世紀後半急激な増加

集落の再編 背景は？



(a)群集墳と首長墓の分布(江口2014より) 武蔵の古墳時代後・終末期を中心とした主要古墳分布図

23



多摩川中流域左岸の古墳(群)と集落の分布図(江口2014より)

24

上円下方墳の分布

国史跡 武蔵府中 熊野神社古墳



静岡県沼津市清水郷北2号墳

福島県白河市野地久保古墳



国史跡 石のカタ古墳

25

イ 7世紀末から8世紀初頭に武蔵国の国府が成立

★国府は、天武朝後半期(683~685年)に国境が確定し、中央集権的な地方支配を推し進めるため、中央から派遣された国司が常駐するために、国郡制との関わりの中で、独立した官衙施設として7世紀末から8世紀初頭頃までに諸国に設けられたとする大橋泰夫氏(大橋2005・2011)の説を支持。
=平城京遷都(710年)以降ではなく、藤原京成立(694年)の影響を考える。

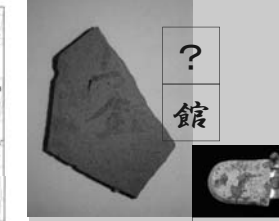
○国府域は、奈良時代以降ほど稠密ではないものの、7世紀末から8世紀初頭頃には、突如として、東西約2.2km、南北約1.5kmの範囲に及ぶ。この段階で、段丘から約1kmも段丘内部に堅い建物跡が進出し、大型井戸も掘削されている(インフラが整備されている)こと。⇒ふちゅう地下マップ

○武蔵国府跡以外の一般集落遺跡では、ほとんど出土しない口径17cm以上の大型丹塗り盤状杯が広範囲で出土していることは、すでに律令体制下の国府整備に向けた確実な動きがこの段階に見られることを裏付ける。



26

8世紀前葉に成立する国衙を遡る初期国衙は未発見ながら、初期国司館(国宰所)が初期国府の機能を兼ね備えていた可能性も考えられることから、この段階を国府成立期とできる。



出土した鍬金帯金具



27



武蔵国府城の空間構成(江口2014より)
武蔵国府城は、堅穴建物跡、掘立柱建物跡、区画溝、道路跡などの主要な遺構とその時期的推移及び土器・円面瓦などの遺物の分布から、国府を基点とした道路網が形成され、官衙ブロックが散在しながら、国府域が面的に連続することが明らかになっている。

28

古代の府中の人口は？

●古代の人口

9世紀頃の日本の推定人口＝約600万人（澤田吾一1927）
平城京は約5～10万人。相模＝約10万人。武蔵＝約13万人。

●武蔵国府の人口（ふちゅう地下マップ）

- ・武蔵国府域で時期の特定できる堅穴建物数は、全体で約4,050棟
- ・奈良時代前期、8世紀前半葉＝234棟
- ・国府域全体約2,000,000㎡÷調査対象面積約342,800㎡＝国府域全体の約17%
- ・奈良時代前期の堅穴建物234棟÷17%は、1,376棟
- ⇒奈良時代前期の武蔵国府には1,300棟×αの人口がいたことになります。

●参考

「養老五年（721）下総国葛飾郡大嶋郷戸籍」（東大寺正倉院文書）
葛飾郡内の甲和里、仲村里、嶋俣里の三里全体で1,200人程の人口
⇒奈良時代前期の武蔵国府には、一里（郷里制下の一郷）を超える人口が集中していた。

29

◆なぜ、武蔵国の国府が府中市に置かれたのか？

ア 国府の管理・運営を在地の有力者（後の郡司層）に任せられるだけの下地が整っていたこと。7世紀中頃の大きな変換も影響がなかったとは言えない。

イ 武蔵国のなかで、南から見て都に近い立地。宝亀二年（771年）以前から東海道武蔵路（相模・武蔵連絡路）はできていた。

ウ 駅路（東山道武蔵路）、伝路（武蔵国府と諸郡を結ぶ道路網）と多摩川の交通の結節点という水陸交通の要衝。

エ 災害（水害）に遭いにくい、安全な広い国府域を想定できる立地条件。多摩丘陵を越えて、多摩川を渡った最初の段丘面。

＝武蔵国の政治、経済、文化の中心となる古代地方都市で、その国の首都。

★まだほかにも理由があります⇒後半へ。

30

武蔵国府（と国分寺）の地理的特徴（武蔵国府跡（国衙地区展示館パネルより）



31



③考古学から明らかにできる古代の多摩郡と郷の実態

●水系から集落のまとまりをとらえる。

古代の多摩郡とは？
素朴な疑問から

古代の
国＝68
郡＝591（延喜式）
里（のち郷）
＝武蔵国で119

ちなみに現在は
平成26年＝1,741
平成13年＝3,447

（左図 江口2014より）

32



古代多摩郡の10郷（従来案）

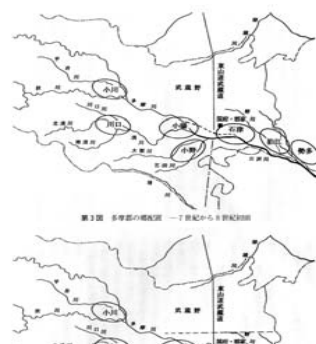
『和妙類聚抄』

- 小川郷：あきる野市小川周辺
- 川口郷：八王子市川口周辺
- 小橋郷：国立市青柳周辺
- 小野郷：多摩市小野神社周辺
- 新田郷：調布市調布ヶ丘周辺（布多天神社）、杉並区高円寺周辺
- 小嶋郷：調布市城（小島町）周辺
- 海田郷：世田谷区鎌田周辺、羽村・青梅市・奥多摩町一帯、杉並区天沼周辺
- 石津郷：日野市石田周辺
- 狛江郷：狛江市駒井周辺
- 勢多郷：世田谷区勢田周辺
- 『日本霊異記』・『今昔物語集』
- 鴨里：昭島市大神周辺

33

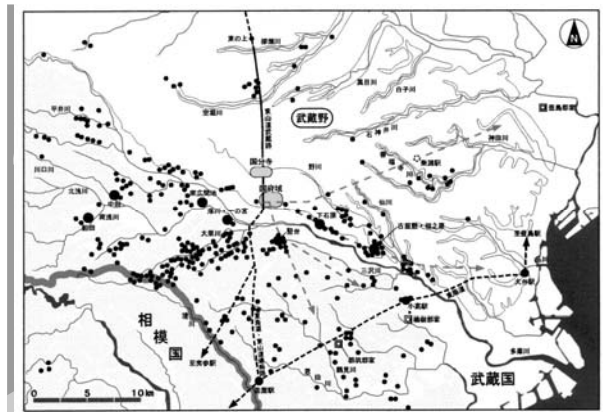
多摩郡の郷の分布（これまでの案）

深澤（2002）



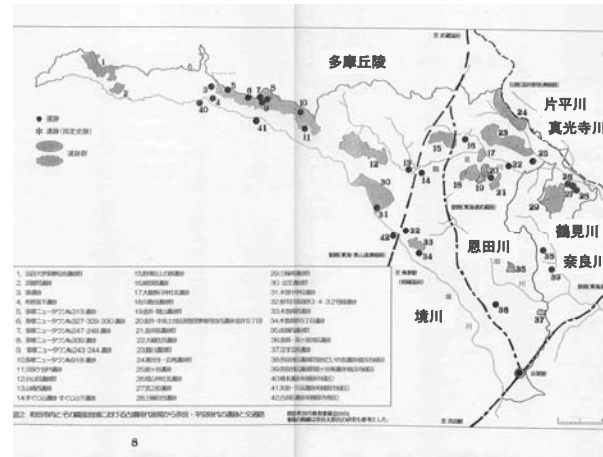
河野（2007）

34

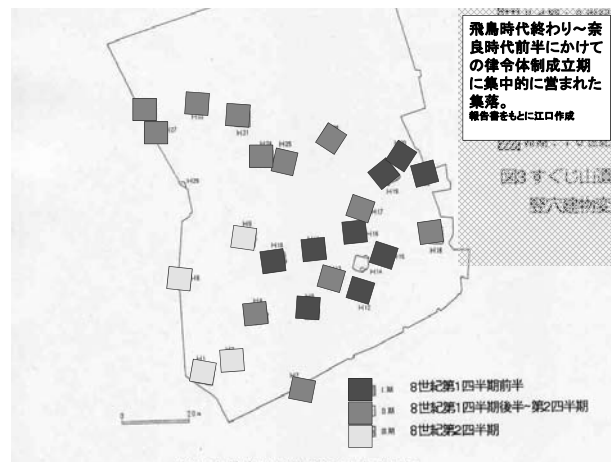
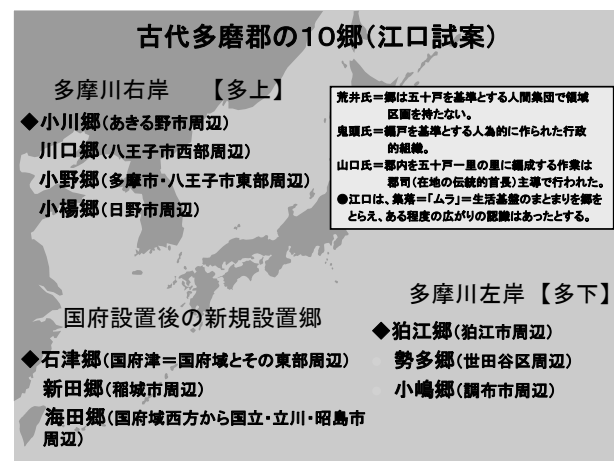
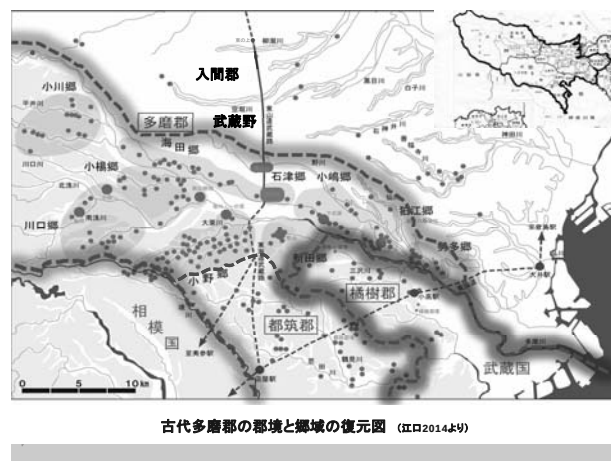
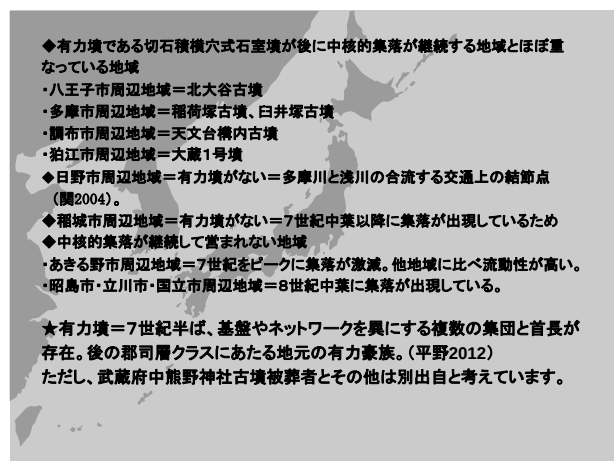
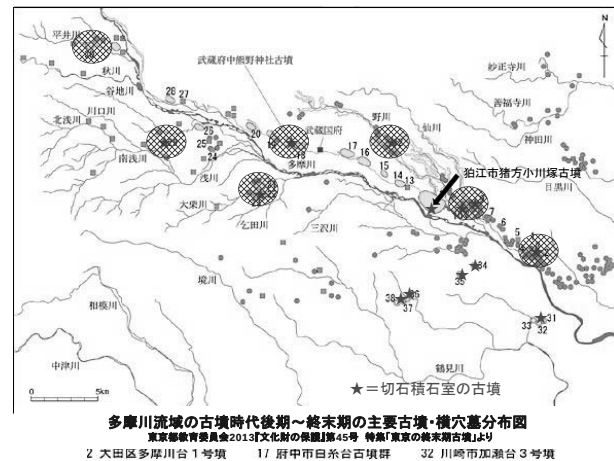


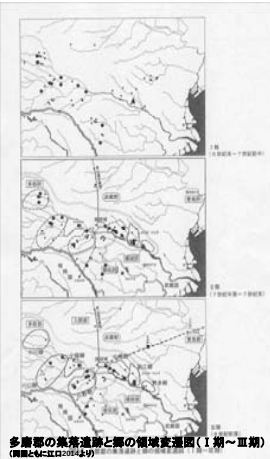
分析対象とした多摩郡の集落遺跡（発掘調査報告書で堅穴建物の年代が特定できる資料が揃っている335遺跡、対象面積約292万㎡、堅穴建物数約1,400棟の堅穴建物の時期別推移を集計 江口2014より）

35

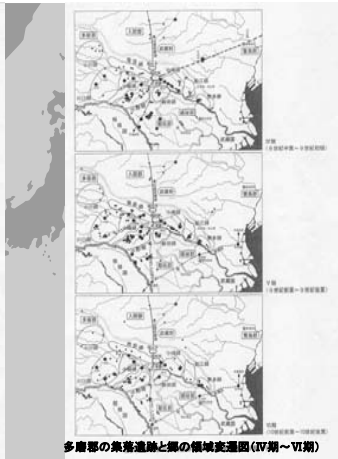


36

[illegible]



多磨郡の集落遺跡と郡の領域変遷図(Ⅰ期～Ⅱ期)
(河内県立三上公民館蔵)



多磨郡の集落遺跡と郡の領域変遷図(Ⅳ期～Ⅵ期)

◆考古学からとらえる古代の多磨郡の領域と郷のあり方

現代に生きる私たちは、自己の居住地がどこの市町村に属し、その境がどこまでか、地図などを使って容易に把握することが出来るし、日常生活の行動範囲も、市町村境を越えて広がっている。

しかし、古代の人々は、自然地形等をもとに、例えば誰もがわかる山や川などが郡の境界として認識され、その境界は、よほど顕著な河川などが無い限り、観念的な空間領域として意識されていた。⇒河川水系ごとに集落をとらえる。

①古代多磨郡の郡域

多摩川とその支流の水系ごとに集落が分布していること、武蔵国分寺以北には広大な「武蔵野」が広がっていることから、設定。このように考えれば、決して多磨郡は広大な郡域のなかに集落が散在するのではなく、郷域ごとにまとまりをもった地域だったことがわかる。

②古代多磨郡の郷名比定とその範囲

●国府成立直前の飛鳥時代

多摩川右岸＝小川、川口、小楊、小野、新田

多摩川左岸＝小嶋、粕江、勢多

●国府成立後の奈良時代⇒国府周辺に多くの人口が集住⇒新規に郷を設置
国府近傍＝石津、海田を新設。

- 多磨郡の領域は、河川水系と広大な武蔵野(原野)に基づいて設定された。
- 郷の範囲は、多摩川を中心とした水系とその周辺の沖積低地及び谷間に展開する集落が根拠になっていた。
- 武蔵国府は、前半で述べたように、マクロ的な視点では水陸交通の要衝に設置されたが、国府所在郡というミクロ的な視点では、7世紀後半から8世紀初頭にかけて、多磨郡の上下の地域編成の境界付近(上下二分割の中間地帯)に置かれたともいえる。

⇒なぜか？

飛鳥時代から奈良・平安時代前期は、律令国家体制の成立から確立期にあたり、地方の支配体系も中央集権体制へと大きな変化を遂げた時代であった。律令国家は、古墳時代まで続いた地域社会構造の解体と、官僚支配体制の確立を目指したので、その政策に伴い、各地域で新たな開発に伴い、集落の再編成が行われた。そのひとつの大きな要因として、地域支配の拠点である国府の建設といった国家的レベルの開発事業に関わる労働力確保とその維持・管理を目的とした集落の再編があった。

国府の建設から維持・管理には、国司主導のもと、郡司層クラス(在地の有力者)の協力が欠かせなかったから⇒国府とその所在郡を一体的に考える。

引用・参考文献(五十音順)

- 荒井健治 1995『国府集落と国府所在郡の集落』『ムラ研究の方法-遺跡・遺物から何を読みとるか-』
帝京大学山梨文化財研究所編 岩田書院
- 荒井健治 2013『武蔵国府の成立と展開』『古代東国の考古学1 東国の古代官衙』高志書院
- 荒井秀規 2009『領域区画としての国・群(郡)・里(郷)の成立』『古代地方行政単位の成立と在地社会』
(独)国立文化財機構奈良文化財研究所
- 江口 桂 2014『同成社 古代史選書13 古代武蔵国府の成立と展開』同成社
- 大橋泰夫 2005『国府成立の一考察』『古代東国の考古学-大倉宣亮氏追悼論文集』大金宣亮氏追悼論文集刊行会
- 大橋泰夫『古代国府の成立をめぐる研究』『古代文化』第63巻第3号、財団法人古代学協会、2011
- 小野一之 1995『古代多磨郡の郷の分布と開発』『月刊歴史手帖』第23巻10号 名著出版
- 小野一之 1997『古代「武蔵野」の展開-国府の周縁-』『府中市郷土の森紀要』第10号東京都府中市郷土の森
鬼頭清明 1979『律令国家と農民』塙書房
- 鬼頭清明 1989『郷・村・集落』『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集 共同研究「古代の集落」
- 河野嘉秋 2007『古代多磨郡の郷配図』『多摩考古』第37号、多摩考古学会
- 金田幸裕 1995『国府の形態と構造について』『国立歴史民俗博物館研究報告』第3
(後)『古代景観史の探求 宮都・国府・地利』吉川弘文館 2002に収録
- 津田吾一 1972『奈良時代民政経済の教訓的研究』拾書房
- 関 和彦 2011『古代「地名」を考える-多摩川水系を中心に-』『八王子市史研究 創刊号』八王子市史編集委員会
- 寺崎保広 2013『若い人に語る 奈良時代の歴史』吉川弘文館
- 中村太一 1996『日本古代国家と計画道路』吉川弘文館
- 中村順昭 2003『武蔵国の国司と在地社会』『シンポジウム古代武蔵国を考える』古代武蔵国研究会
- 平野卓治 2012『地域社会における群・郡成立の前提-武蔵国都筑郡を事例として-』
『日本古代の地域社会と周縁』鈴木靖民編 吉川弘文館
- 福田健司 1996『多摩川中流域における沖積地の開発-沖積地の遺跡と開発の契機を探る-』
『帝京大学山梨考古学研究所研究報告』第7集
- 深澤靖幸 2002『武蔵国府・国分寺跡出土の「多上」「多下」文字瓦をめぐる』
村田文夫先生追憶記念論文集『地域考古学の展開』
- 深澤靖幸2010『古代武蔵国府の成立』『府中市郷土の森博物館紀要』第23号
財団法人府中文化振興財団 府中市郷土の森博物館
- 山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- 山口英男 1995『平安時代の国衙と在地勢力-9・10世紀の国衙・国府-』『国史学』第156号 国史学会